

促成キュウリ栽培における基肥リン酸削減の目安



写真 可給態リン酸 60mg/100g 基肥リン酸無
施用区の H23 年 2 月の様子

表 試験区と可販果収量

可給態リン酸 (mg/100g)	基肥リン酸 (kg/10a)	可販果収量 (kg/10a)	
		H21年度	H22年度
60	0	23,716 (104)	17,339 (100)
	44 (慣行量)	22,815 (100)	17,328 (100)
150	0	22,393 (98)	17,980 (104)
	22 (半量)	22,656 (99)	17,839 (103)
250	0	24,245 (106)	18,820 (109)
	22 (半量)	24,766 (109)	19,278 (111)

注1) H21年度は、H21年10月6日(定植)～H22年6月1日、H22年度は、H22年10月7日(定植)～H23年5月31日
 注2) 可販果収量は、曲がりか4cm未満の果実の収量。
 ()は可給態リン酸60mg/100g基肥44kg/10aの収量に対する指数。

高知県の施設キュウリ栽培ほ場では、リン酸が蓄積しており、施用されるリン酸の減肥が課題となっています。そこで、促成キュウリ栽培において、可給態リン酸の異なる土壌を用いて基肥リン酸減肥の影響について検討しました。

上の表のように可給態リン酸を 60、150、250mg/100g の 3 水準に調整した土壌（隔離床）に、基肥リン酸を慣行量（44kg/10a）または半量（22kg/10a）施用、あるいは無施用とした 6 試験区を設け、キュウリの収量を 2 年にわたり調査しました。

気象条件や病害虫の発生等により平成 22 年度は 21 年度よりも全体的に収量が少な

ったものの、両年度とも基肥リン酸を半量施用あるいは無施用としても慣行量施用した場合と同程度の収量でした（表）。また可給態リン酸が同じ水準間では、基肥減肥による収量差は認められませんでした（表）。

以上から、可給態リン酸が 60mg/100g 程度以上であれば基肥リン酸を無施用としても収量への影響は少ないと考えられました。

なお、本研究は、農林水産省委託プロジェクト研究「気候変動に対応した循環型食料生産等の確立のための技術開発」の中で実施しています。

（土壌肥料担当 速水悠 088-863-4915）